

# 大阪インターナショナルチャーチ

2008年3月2日

ダニエル エルリック牧師

シリーズ : 始まり # 7

題 : 命の木

聖書の箇所 : 創世記 2:4 - 14

## I. 初めに

おはようございます。カレンと私は、タイで楽しい時を過ごしましたが、その間、私たちは、皆さんが懐かしくてたまりませんでした。今、日本に戻りお会いできてとてもうれしいです。報告の時に、私たちの旅行の写真をお見せしたいと思います。では、今日の説教を進めていきましょう。

1601年にジェコブ・セーヴァリーによって描かれたエデンの園の絵は、今日の説教の題である「命の木」のちょうど良い紹介となります。エデンの話は、前に終えました創世記の創造の週の後に語られていますが、実のところ、筆者は、人類の創造に関してもっと詳しいことを伝えるため、第6日目の出来事に戻って話しています。さあ、創世記 2:4b-14 を読んで始めましょう。



## II. 聖書朗読 : 創世記 2:4b-14 (新共同訳)

(4b) 主なる神が地と天を造られたとき、(5) 地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。(6) しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。(7) 主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。(8) 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。(9) 主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。

(10) エデンから一つの川が流れ出ていた。園を潤し、そこで分かれて、四つの川となっていた。(11) 第一の川の名はピションで、金を産出するハビラ地方全域を巡っていた。(12) その金は良質であり、そこではまた、琥珀の類やラピス・ラズリも産出した。(13) 第二の川の名はギホンで、クシュ地方全域を巡っていた。(14) 第三の川の名はチグリスで、アシュルの東の方を流れており、第四の川はユーフラテスであった。

## III. 教え

懐疑論者は、エデンの園の話をも神話として扱いますが、聖書は、一貫してエデンは実在する所であり、アダムとエバを本当の人間であると語ります。詳しい記述のいくつかは、隠喩的、象徴的かもしれませんが、エデンの話は、歴史です。詳細の地理的な描写は、エデンが現実の所であったことを強調しています。ここにチグリス、ユーフラテスを含めた4つの川が載せられています。多くの聖書学者は、エデンの園がこの地図が示している所に、おおよそ位置しているにちがいないと信じています。けれども、ノアの洪水と地質学上の妨害が地域の景色を変えてしまっている事でしょう。ですから、かつてエデンがどこに位置していたか明確な所を見つけるのは、たぶん不可能だと思われます。しかし幸いなことに、エデンの位置は、そんなに大切なことではありません。



それより遥かに大切なことは、神が世界を良き所に創造され、人類が、神との近しい関係を持って、すばらしい人生を歩んでいくため必要とされるものを全て備えてくださったという事実です。4節では、このトピックをこう言って紹介しています。「主なる神が地と天を造られたとき、」というように。これが、聖書の中で、「主なる神」という称号が使われている最初の箇所です。言語ヘブライ語では、その言葉は、「ヤハウエ エロヒム」と言います。創世記第1章で、神は「エロヒム」という名前と呼ばれ、その名は、創造者としての神の権威と力を強調するものです。しかし、創世記2:4からは、神は、よく「ヤハウエ」と呼ばれるようになりました。その名は、「主」という意味であり、それは個人的であり親密な関係を言います。

創世記2:4で「ヤハウエ エロヒム」が使われているのは、著者が、神と人間との関係に焦点を当てていることを示しています。この「ヤハウエ」というのは、神の個人的な名前ですので、ある人々は聖書で、その名前が直接使われるべきだと主張します。けれども、ほとんどの聖書の翻訳者は、「ヤハウエ」を「主」として翻訳する方が良いと感じています。それは、ヘブライ語に慣れていない人々にとって、個人的な関係を持つタイトル「主」の方が意味があるからです。ともかく、私はここで詳しく話そうとは思いませんが、ある聖書では、「エホバ」という名前も使われていることを話しておかなければなりません。その名は、伝統的な英語の発音なのですが、手書きの写本の間違いから「エホバ」となったのです。今日、ほとんどの学者は、正しい発音は、「ヤハウエ」であることに同意しています。しかし、他の多くの言葉にあるように、ヘブライ語での名前の着想は、単に組み合わせられた音より遥かにすばらしいものです。聖書が、私たちに神の御名を褒め称えるように命令するとき、それは神の役割、地位、御性格について話しているのであり、特に名前における音の組み合わせを単に語っているわけではありません。主要な点は、発音ではなく、又は神の名前が「主」と訳されるかどうかということでもありません。その要点は、創造主なる神が私たちと近い関係、個人的な関係を持つことを心から望んでくださっていたこと、そして、その関係は、全ての物の創造主として、命の主として、神を褒め称える私たちが始まることを理解することなのです。

創世記2:5-6にこうあります。「地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。」ここで、言われている木や草は、耕されることが必要とする種でした。ですから、「野の木」とか「野の草」という風に言っているのです。これらの植物は、2つの理由で、まだ成長していきません。一つ目は、まだ雨が降っていないこと、二つ目は、それらを耕す人がいないということです。創世記2:6では、神が水の不足の解決策を備えてくださっているとわかります。でもここで私は、創世記2:6の厳密な意味が、少し不確かであることも、話しておくべきでしょう。なぜなら「streams:水」として訳されているヘブライ語は、聖書のもう一個所、ヨブ36:27だけしか出てきませんから。ただし、そこでは、雨の生産について明らかに述べられています。ですから、創世記2:6でも又、神が雨をもたらせてくださったことは、かなり可能性のあることです。

水を用意してくださったあと、神は又、土を耕す必要性の問題も解決してくださっています。創世記2:7です。「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」神が人の体に使われた基礎的な物質は、動物に使われたのと同じ物質でした。それはただ、ふつうの古い泥土なのです。「形作り」という言葉は、過程を語っています。しかし、その過程の詳細は何一つ語られていません。長くて複雑な進化の過程であったかもしれないし、短くて簡単な奇跡的な過程であったかもしれません。神は、御自身で選ばれた何らかの過程によって、人を形作る力を持っていらっしゃると思います。けれども、人の体は、「生きて」はいないのです。神が人の鼻に、命の息を吹き入れてくださるまでは。そうしてくださった後、ようやく人は「生きる者」となるのです。動物たちは、これを、つまり「命の息」を受け取らないで、肉体的に生きていたので、この一節は、霊的な命について語っているようです。神は、御自分の息を吹き入れられ、言い換えれば、神の霊を与えられることで、人を霊的な生きる者に創造してくださったのです。神は、遠くに立ち、人に命を与えるよう言われたのではありません。その代わりに、人を近くに引き寄せその鼻に命の息を吹き入れてくださいました。そのイメージ

は、ちょうどキスをしているのと同じようです。

創世記 2:8-9 を見ましょう。「主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらずあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた。」神は、もうすでに美しい園を設け、木々を生えいでさせ、人のためにちゃんと用意をしてくださっていました。そこで、神は人をその園に置かれたのです。人が動物に名前をつけ、園の木や植物を耕し、世話をするようにと。そして、園の中央に2本のとても特別な木を生えいでさせられたのです。次の2週間の間に分かりますように、これらの木は、決定と選択を表しています。人はエデンの園にいましたが、神に霊的な命を与えられていました。神は又、選ぶ能力をも与えられたのです。言い換えれば、神は人に自由意志をも与えられたということです。

約400年前、ヤン・ブリューゲルは、エデンの園をこの絵のように描きました。でも、皆さんのエデンの園は、どんなイメージでしょうか。もし、皆さんが絵描きなら、園をどのように描かれますか。私の推測では、私たちは皆、いくぶんエデンを違うようにイメージしていると思われる。でも、皆さんがどんなに絵の細部までを想像されたとしても、本当に素晴らしい所であることだけは確かです。驚いたことに、神を愛する人々のために神が用意されたところは、エデンの園どころではなく、もっと素晴らしい所なのです。コリントの信徒への手紙 I 2:9 は、こう伝えています。「目が見もせず、耳が聞きもせず、／人の心に思い浮かびもしなかったことを、／神は御自分を愛する者たちに準備された」と。

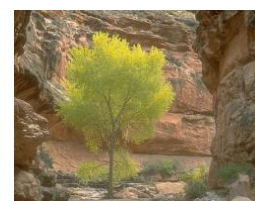


「目が見もせず」この御言葉には、アダムとエバも含まれています。アダムとエバが、エデンの園に置かれている時でさえも、彼らは天国の素晴らしさを心に描くことはできなかったでしょう。あるクリスチャンは、天国は、ちょうどエデンの園に帰っていくようなものだ、と想像します。けれども、聖書では天国を都として描いています。それは、素晴らしい都であり、そこには神御自身が光であられるのです。自然愛好者にとって、もしかしたらそれは、都の中心にある美しい庭かもしれません。しかし、聖書では天国を都、すなわち新しいエルサレムとして語っています。完全に聖なる都を描くこの画像は、親しい愛すべき神との交わり、私たちお互いの交わりを力強く表しています。



この天国の都について言えば、ヨハネの黙示録 22:1-2 ではこう言っています。「天使はまた、神と小羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せた。川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があって、年に十二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す。」命の水と命の木の実は、都の中に豊かに溢れているのです。おそらく、これらについては、文字通りに捉えられることを意図されていないでしょう。多分それらは、キリストと私たちの関係を隠喩的に表していると思われるが、そのメッセージは、はっきりしています。その都は、溢れるばかりの豊かな命なのです。それは、自由に与えられ、常に新しくされています。ここで、存在していないものにも気付いてください。善悪の知識の木は、エデンの園にありましたが、この天国の都にはありません。天国の都は、豊かな命に満たされ、誘惑から解放されている所なのです。

エデンの園には、文字通り命の木と呼ばれる木があったと、私は信じます。けれども、聖書の残りを終わりまでしっかり読みますと、この木は、祝福と救いの象徴として使われていると分かります。たとえば、箴言 11:30 に、こう書かれています。「神に従う人の結ぶ実は命の木となる。知恵ある人は多くの魂をとらえる。」



命の木と救いとの関係は、キリストの十字架も木で作られていたことを思い出す時、さらに近くなります。隠喩的に言えば、十字架は命の木です。なぜなら、イエスの十字架上での御業における信仰を通して、私たちは、永遠の命を頂けるのですから。これは、アメリカのデラウェア州にある命の木ルーテル教会のロゴの写真です。これは、命を与えてくれる木と十字架のシンボルと組み合わせてくれています。実に、イエスの十字架は、私たちの命の木なのです。私たちが、十字架にすがりつくとき、永遠の命を頂けるのです



#### IV. まとめ

使徒5章では、ペテロが最高法院のメンバーであるユダヤ人の長老にこう言って教えました。(使徒言行録5:30-31)「わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。」イエスは十字架にはりつけにされ、木に掛けられ殺されたのです。けれども、墓の中に、とどまられていたわけではありません。甦られ、未来永劫まで生き続けられるのです。イエスは生きておられ、今日も、私たちと共に、ここにいらっしゃいます。悔い改めと信仰を持ってイエスの所へ来る人々の罪を赦す用意をしてくださいます。この使徒言行録では、ペテロが、ユダヤの長老の前に立ち、イスラエルの救いを語っているのです。けれども、聖書は、明らかにしています。救いの無料の贈り物は、イエスの元に来る全ての人々、あらゆる国籍の人々に与えられるということ。

ヨハネの黙示録2:7で、イエスはこう伝えられます。「耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者には、神の楽園にある命の木の実を食べさせよう。」命の木から食べることは、救われるということ。そして、それは勝利を得る人々へ与えられるのです。では、一体どのようにして、勝利を得るのでしょうか。恐れと疑いを捨て去り、信仰に生き、罪を悔い改めることで、勝利を得るのです。私たちは、イエスを信頼して罪と死に打ち勝つのです。

皆さんは、不信仰、恐れ、疑いに打ち勝つ用意ができていらっしゃいますか。イエスをあなたの救い主として、主として、全き信頼を置いていらっしゃいますか。イエスは、皆さんを迎え入れ、命の木から実を与えようと準備してくださっているのです。イエスを信頼してください。イエスの愛を信じてください。そうすれば、救われるのです。あなたの命をイエスに委ねましょう。そうすれば、希望、喜び、平安のうちに生きることができるのです。さあ、祈りましょう。

#### V. 最後の祈り